



私たちはヨーロッパで、地図を探しさがししてラスコーやアルタミラに先史時代の洞窟画をみにいく。ここにしかないものだから、これらの彩色壁画は、国際的に評価されるのである。ラスコーに、ピカソとかミロとか有名大家の作品を一点、あるいは数点並べても誰もそのためにはラスコーにいかない。こういう美術館の分骨主義的運営はやめて、そこにだけあるものをまず正確に整理展示するのが筋の通った美術館運営だと思う。今のうちに北九州の、今では国際的にも知られはじめている装飾古墳も博物館に移すか、そのままの保存を考えるかしてもらいたい。アルタミラやラスコー同様、国際的にも貴重な存在になることは疑いない。

有名大家の作品を、まるで本山から聖者の骨を分骨して末院を建てるような具合に購入展示していくほど、シニクな美術館運営はない。そんなことをすれば、世界中どこへいっても同じ名前しかみられないことになる。九州派が北九州で起ったこと、これが戦後美術の焦点のひとつになったことも偶然ではありえない。古くからの文化の中心であった博多の伝統と深く結びついているはずである。北九州といえば、印象主義から出発して独自の画境を築いた坂本繁二郎や、日本的浪漫派の開祖ともいべき青木繁や、さらに日本のシュールレアリスム前派ともいべき古賀春江のことが直ちに思いだされる。これらの作家は、それぞれの時代の国際的に名を知られた画家たちの作品に比べて、独自であることによって、遜色がないのである。それらの作家の作品さえ、容易にはみられない。

日本で九州派やネオ・ダダが熱っぽい動きを生えていた時代には世界中に、おなじ世代